

三手先構造の変遷

建築物研究室

三手先斗拱は8世紀において、薬師寺東塔・海竜王寺五重小塔にみられるような二手目の斗拱が支輪桁を受けない構成から、唐招提寺金堂にみられるような支輪桁の出現へと変化するとは、すでに知られるところであるが、この間にあっては尾垂木の側通りでの支持は、最上段の通肘木に組込んで架けられている。一方、当麻寺東塔、西塔では尾垂木は側通りでフリーになり、支持位置は前方へ一手移動する。元興寺五重小塔でもこの傾向がみられ、三手先構造は8世紀末より大きな変化を生じている。この変化は尾垂木勾配が強められる結果をもたらしており、やがて地垂木の勾配に影響するため、三手目の位置を内方に移動し丸桁の高さを高めるようになる。醍醐寺五重塔の三手目の尾垂木上の斗が一廻り大きくつくられるのは、このような過程の中で理解される。三手目の移動は支輪の立上りを強めることになり、意匠的には軒蛇腹が視覚上重要な構成材になり、垂木割との調和がはかれるようになる。したがって、古くは丸桁間を総割りとした垂木割が柱真を手挟むように変化する。

斗拱積上げの新形式として注目されるのは平等院鳳凰堂中堂の三手先斗拱である。この堂では入側柱がないため、妻中央柱上の斗拱が桁行には独立し天秤による均衡をはかっており、尾垂木の支持として内側二手目に束をたてて釣合をとっている。宋様式にみられるような上昇による処理が考慮されていないのは和様の発展形式を示すものといえようが、あるいは宋様式の間接的伝播がこのころからはじまったのであろうか。ところで鳳凰堂では壁付の三斗組は2段に組上げられるのに対して一乗寺三重塔では三斗組は下1段だけをみせかけとし通肘木で連結している。この塔では壁付斗拱を一体化して構造強化を求めているが、一方では四天柱を側柱より高め肘木で繋ぐなどの新しい試みが行われている。いわゆる中世和様三手先の前駆的手法が認められ、変遷過程上、この塔は重要な位置を占める。丸桁と実肘木の一木化はすでに醍醐寺五重塔ではじめられているが、この塔では最上層が通実肘木となり、この点でも中世的である。塔内では醍醐寺のような斗の簡略化からさらに進み、斗の省略に至っている。

三手先構造は以上のような古代を通じて変遷をうけ中世にさらに変化する。その第一歩は内部斗拱の省略化と斗・肘木の一木化であり、斗拱としての形を残しながら、内部では通肘木ないしは力肘木が、貫あるいは梁としての部材に変貌する。そしてまた、構造の強化のために、三手先目を側あるいは内部から見え隠れの繋材をいれて緊結するようになる。一方、門などにいたっては梁間が狭いこともあって、尾垂木どうしの尻を連結するなどの工法が考えられている。中世には禅宗様式がわが国にもたらされることもあって、三手先構造がより以上多様化する。これらの中にあって、石山寺東大門や御上神社楼門などの尾垂木のない三手先構造の出現、海住山寺五重塔・室生寺灌頂堂などのような尾垂木をもつ二手先など、三手先構造の変形がみられるのは興味深い。なお、本研究は科学研究費補助金によるものである。(工藤 圭章)